大分県

街道１

大分の街道遺産の特徴は、大規模で、多様で、保存状態の良い石畳が複数存在している点である。中でも、今市宿の石畳（大分市、文禄３（1594）以降、県史跡）Ⓐと酢屋の坂（杵築市、正保２（1645）前後?）Ⓐと湯平温泉の石畳（由布市、享保年間（1716-35））Ａの３つは、宿場、城下町、温泉地と状況は異なるものの何れも町中の石畳であり、江戸期では特異な存在である。

なぜならば、江戸期に全国で敷設された石畳の99%は峠道などの急勾配箇所に限定されており、町中に敷設されたものが現存している例はほとんどないからである。それが、大分県には３ヶ所も見事な形で残り、酢屋の坂と湯平温泉の石畳は観光にも大きく役立っているところに大分県らしさがある。

峠越えの街道石畳の中では石坂石畳道（日田市、嘉永３(1850)、県史跡）Ⓐが、その長さ（1.2km）、細工の細かさ（中央部と両脇で石材が異なる）、由来（牛馬の通行の改善）、保存状態の良さ、16 ヶ所の屈曲部を有する見栄えの良さで群を抜いており、全国屈指の“峠の石畳”と言える。

街道２

大分を代表する２つ目の街道遺産は、木橋である。九州というと石アーチ橋の存在が定番的な特徴であり、次ページでも取り上げているが、ここでは全国にあまり残存例のない木橋について紹介したい。すなわち、宇佐神宮の呉橋（宇佐市、元和８（1622）、県有形）Ⓐと薦〔こも〕神社の呉橋（中津市、嘉永３(1850)、市有形）Ⓐ〔写真は次ページ左上〕の２橋である。両者の保存状態は全く異なり、宇佐神宮の呉橋は朱塗りのため古材と新材の区別がつきにくく、建造時の刻銘の残る親柱以外どこがオリジナルなのか分からない。西端が RC 桁橋になっている点も違和感を感じさせる。一方、薦神社の呉橋は、宇佐神宮の呉橋より 200 年以上も後の築造であるが、倒壊の危険性も感じさせるその残存状況からすれば、木部のほとんどが建造当時のものと推測でき、わが国でも例を見ない長寿命の木橋と言えよう。このように、石橋文化圏にありながら、国内に６橋しか残っていない近世由来の屋根付き木橋を２基も有している点に、大分県の特徴がある。

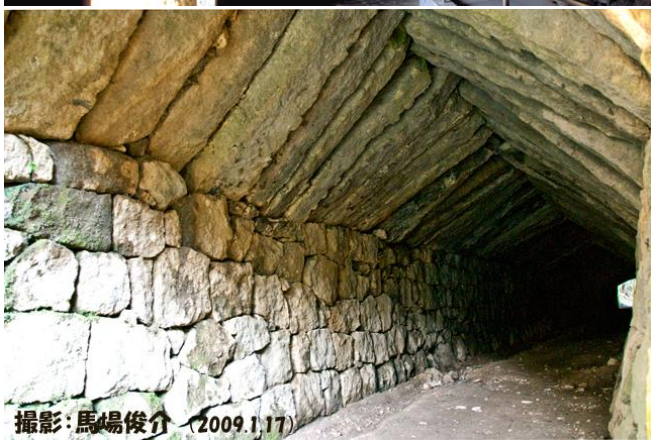
街道３

大分を代表する３つ目の街道遺産は石アーチ橋である。九州における石橋の創始県である長崎、石橋の大量生産県である熊本などと比べると、残存する石橋が規模・量ともに見劣りすることは否めない。ただ、その中で個性的な石アーチの存在が、大分の石アーチを独自のものとしている。すなわち、アーチの規模は無視し構造だけに注目した場合、阿弥陀廃寺のめがね橋（国東市、文久年間（1861-64）以前、市有形）B に代表される迫石だけで構成されたアーチ橋、そして、妙経寺の庭園橋（杵築市、安永

4（1775）、県名勝）B に代表される合掌式のアーチ（中央で２つの石梁を接合させた特殊な形式）の存在が、大分の特徴である。

街道４

街道の最後にして、最大の特徴は道路トンネルである。第一にあげるべきは、あまりにも有名な青の洞門（中津市、寛延３(1750)、県史跡）Ⓐであり、第二は、国内に現存する唯一の合掌式道路トンネル、川原隧道（日田市、文政年間頃（1821-31）、県史跡）Ⓐである。江戸期のトンネルはもともと 99%以上が水路トンネルで、道路トンネルはきわめて稀である。しかも、水路でも道路でもトンネルは素掘である。トンネルの側壁を石積壁で補強し、その上に合掌アーチを組んだ現存例は、道路では川原隧道、水路では熊本県の幸野溝の旧貫の２ヶ所だけであり、川原隧道の稀少さが分かる。



舟運１

大分県には大河川はないが、岡藩が大野川で行った河川舟運で中継基地となった犬飼港（豊後大野市、明暦２(1656)以降、市史跡）Ⓐの石敷きの荷揚げ場

の保存状態は素晴らしい。全国の川港の遺構の中で最も保存状態が良いだけなく、関連施設して、「火の道」、「波乗り地蔵」の線刻などがセットとして残っている点も高く評価できる。

農業１

大分県の近代の土木遺産の特徴は、水路用の石アーチを駆使した農業用水網の構築にあるが、近世にもその萌芽が見える。すなわち、九州の他県に比べ水路用の石アーチが多く、5 橋が残されている。その中で一つあげるとすれば広瀬井路水路橋（宇佐市、慶応 2（1866））B であろう。

農業２

農業関連では水路トンネルも数多く掘られた。それらの中で最も特徴的なものが大分市の南東部の丘陵に「もぐらの巣」のように掘り進められた享保井路の隧道群（大分市、享保 11（1726））B に代表される用水トンネルである。トンネルそのものはごく普通の素掘だが、トンネルが連続する用水路の曲がりくねったルート選定は非常にユニークである。

防災１

大分には、“1 件しかないが、それが全国的に見て素晴らしい”のが多いが、防災（治水）面では高田輪中の石垣群（大分市、江戸期）A がその範疇に入る。輪中といえば木曽三川の輪中群が有名だが、木曽三川の場合は輪中を囲む土堤防と、それが万一決壊した場合の共同の避難所（救命壇）の組み合わせで安全を担保しようとした。それに比べ高田輪中は、すべての家が石垣上に建てられている点に特徴がある。現在でも多くの家々に石垣が残り、それが地域の主要な景観構成要素となっている。

衛生１

県内各所に存在し、しかも、他県にはほとんど存在しないという特殊な遺産が石風呂である。凝灰岩の崖を掘り込んで四角い“部屋”を造り、内部を高温のサウナ状態にするとともに、薬草を蒸すことで病気の治療に用いた公共施設である。緒方地区に集中し、中でも尾崎の石風呂（豊後大野市、寛永年間（1624-44）、国重要有形民俗）A が、その代表格である（山口の石風呂とは成立過程が全く異なる）。